

情報通信審議会 情報通信技術分科会
新世代モバイル通信システム委員会（第8回）

－ 議事概要 －

1 日時

平成30年3月6日（火）10:00～11:10

2 場所

中央合同庁舎第2号館 総務省8階 第1特別会議室

3 出席者（敬称略）

（1）委員等

森川 博之（主査）、三瓶 政一、岩浪 剛太、大岸 裕子、小林 真寿美、
藤本 正代、藤原 洋、松井 房樹

（2）オブザーバ

青山 恭弘（パナソニック株式会社）、上村 治（ソフトバンク株式会社）、
庄納 崇（インテル株式会社）、辻 ゆかり（日本電信電話株式会社）
古川 憲志（株式会社NTTドコモ）、松永 彰（KDDI株式会社）、
米山 祐三（日本電気株式会社）、

（3）総務省

高地 圭輔（基幹・衛星移動通信課長）、布施田 英生（技術政策課長）
中里 学（新世代移動通信システム推進室長）、中川 拓哉（移動通信課課長補佐）

4 議題

議事の前に、庄納氏より「平昌冬季五輪における5Gショーケース」の主なトピックを含む最新の5Gに関する動向について紹介がなされた。

（1）技術検討作業班の検討状況について

三瓶主査代理及び事務局より、技術検討作業班で検討を行ってきた内容について中間報告の説明がなされた。また、以下の意見交換があった。

松井専門委員：5Gにより実現される超低遅延は、伝搬路の長さによる遅延を低減させるものではないという認識で良いか。

三瓶主査代理：遅延を定義する場合、無線区間での遅延とend-to-endでの遅延の2通りがあり、end-to-endの場合には、送信機から受信機で信号処理を行い情報が得

られるまでの遅延を含む。接続先の IoT デバイスからフィードバックがかかるような場合には、end-to-end での遅延を定義しなければいけない。現状、3GPP では無線区間での検討を行っており、フレーム構成については、最小で 0.125msec と定義している。今後の運用を考慮すると、end-to-end での議論が必要になる。

松井専門委員：自動車で使用する場合は、どちらで考えれば良いのか。

三瓶主査代理：制御機と被制御機間の end-to-end で考える必要がある。

藤原専門委員：ACK/NACK 制御について、ACK/NACK 信号がそもそも戻って来ないような場合にはどうするのか。

事務局：その場合、ACK が戻ってこなかったということを検出することになる。

藤原専門委員：そうすると、タイムアウトでの制御となるが、低遅延を確保できるのか。

三瓶主査代理：LTE においては、ACK/NACK が戻って来なかった場合は、基地局側から再送し、それでも戻ってこなかった場合は、圏外と判定するものと認識している。

藤本専門委員：平昌オリンピックでの実証を経て、技術的検討等に影響を及ぼした点はあるのか。

事務局：3GPP での要件を全て満たしている訳ではないという意見や、この時期において実現させた点を評価する意見など、様々な意見が挙がっている。日本としては、今回のオリンピックでの実証結果に関わらず、5G の実現に向けて引き続き加速させていきたいと考えている。

藤原専門委員：インテルの説明の中で、ドローンを使用した取組があったが、電波法以外の規制が緩和されているように感じた。事務局として、その点いかがか。

事務局：内閣府の規制改革会議で議論されているものと認識している。また、3GPP ではスマートフォンをドローンに搭載し、パワーコントロールしながら制御するような技術についても議論がなされており、日本としても提案を出しているところである。

(2) その他

事務局より、「モバイルワールド कांग्रेस 2018」の概要について報告を行い、以下の意見交換があった。

藤原専門委員：出展者数は全体で 2300 社程度であり、日本の企業が 20 社程度というのは少ないように感じる。この点、事務局としていかがか。

事務局：1%以下の割合のため、プレゼンスは低いと感じた。今後、日本企業がまとまって出展する JAPAN ブースの形態について、検討していきたいと考えている。

最後に事務局から、次回日程等については、別途連絡する旨案内があった。

以上